

効率的な子育て

1. モリアオガエルの産卵 (地図中①地点)

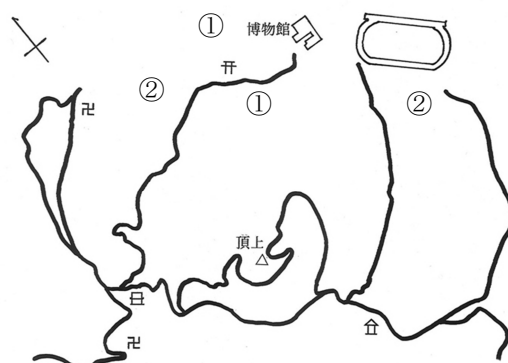
4月下旬から7月上旬まで、打吹山ではモリアオガエルの産卵が見られます。打吹公園では、鎮霊神社、椿の平、椿の平への階段横の各池、動物園のクジャク舎の右の溜まりの護岸や上の樹木です。羽衣池には産卵しません。

樹上生活者のモリアオガエルは、4月の下旬になると雄が上記の産卵池に集まって鳴き始めます。雨後に多く、夜間、雌が繁殖池の樹木などに来ると数頭の雄が抱きつき、総排出口から産卵される卵の寒天質をこれらの雄が後脚でかき回して泡立てます。この泡が卵を乾燥から守るため、空中への産卵が可能になりました。

孵化(ふか)後、泡から出て水中に落ちたオタマジャクシは、イモリなどの捕食者が待っています。コイを放流すると1日で数千のオタマジャクシがいなくなってしまう。コイがいる羽衣池に産卵しないのは、このためです。親は水中の捕食者の有無を樹上で識別しているのです。動物園でもカメのいる左方には産卵しません。しかし、この行動が本能であり、先の成り行きを考えたものでないことは、すぐに無くなってしまふ道路の水たまりの上でも産卵することからもわかります。



モリアオガエルの産卵



2. スミレの閉鎖花 (地図中②地点)

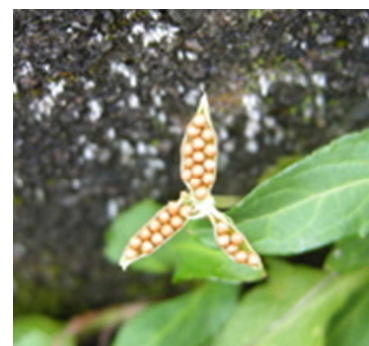


スミレの閉鎖花

花には、花粉の運搬を頼む昆虫に蜜を提供し、存在や着陸点を示す花卉を持つものがたくさんいます。光合成で得た物質を成長や貯蔵に費やさず、やがて無くなる蜜や花卉へ投資しているのです。しかし、この投資を省こうとする植物がでてきます。スミレやセンボンヤリです。

スミレは春に花が咲きますが、あまり種子が作られません。しかし、花は咲かせずに秋まで種子が作られ続けます。蕾(つぼみ)が開くことなく、中で自家受精が行われて種子ができるのです。このような花を、閉鎖花といいます。自家受精は他個体との遺伝子の交流がないため生活力の弱い個体が多くなります。虫に花粉を運搬してもらう方が望ましいのです。

背の低いスミレは、他の植物が少ない早春の目立つ時期に花をつけ、虫を頼みます。周囲の植物が大きくなり、隠されてしまうようになると投資を省き、少なくなった光合成物質で種子を作ることができる態勢に変わります。



スミレの種子